



欺きから守られる

Protection from deception

最近、生態学者らが発表した研究によると、ある種の蝶は、赤蟻をだまして、自分の幼虫の世話をさせるという。蝶の幼虫であるいも虫は、蟻の臭いと、女王蟻の出す音をまねる、すると間もなく、いも虫は巣に招き入れられ、王族のように丁重に扱われる。働き蟻は、いも虫に餌を与え、いも虫の要求にはすべて応える、そして時には、自分の子らまで餌として差し出してしまうのだという。最後には、いも虫は、元の大きさの 100 倍ものさなぎとなるが、蟻の臭いと音はそのまま宿している。この侵入者は、その巧妙なだましの業で、次第に、赤蟻の個体数を、文字通りのみ込んでしまい、激減させてしまう。

この研究結果は、私たちの生活の中に見られる、さまざまの欺きと同様のものなのである。例えば、今日の世界の厳しい経済状態は、投資家、銀行、住宅購入者たちのどん欲さが生み出した、欺きによるものだと言われている。今、振り返って見ると、どうしてこんなことになってしまったのか、どうしたら、防ぐことができたのだろうか、人々は考えあぐねている。しかし、どん欲、利己主義、無気力などは、考えの一つずつを、受け入れ、行動に移すのか、それとも、拒否して、捨て去ってしまうのか、そこから始まるのである。これらの考えは、将来、何かしら良いことがあると、約束しているように思われるかもし

Author's Name / From the Editors

他の日本語記事については、次をご覧ください: <http://www.spirituality.com/christiansciencesakigake/index.jhtml>

© 2009 The Christian Science Publishing Society (CSPS). この記事は、50部までプリントアウトして、非営利として実費で提供することができます。この記事メール (email) で送ったり、ウェブサイトに載せたりすることはできません。代わりに、CSPSのウェブサイトに掲載されているこの記事へのリンクを、メールしたり、ウェブサイトに載せたりしてください。この記事の他出版物に転載する許可を得るには、copyright@csp.com宛に、メールをお送りください。件名は、英語で "Copyright Request" としてください。

れない、しかし、それに同調してしまうと、私たちの心の平安はずたずたにされ、私たちの幸福と健康まで、のみ込まれてしまうのである。そして、それを受け入れることは、男性も女性も生まれながらに弱点を抱えているので同意してしまうのだという、一見、悪気のないものなのかもしれない、つまり、誰でも、簡単に欺いたり、欺かれたりしてしまうのだと、いうことなのである。

よく知られている聖書の話、ヤコブとエサウの話に、このような人生観が示されている。母親の誘いに従って、ヤコブは、兄エサウの格好をして、父親が、エサウに与えるはずだった祝福を、父親から盗む。ヤコブは、「兄エサウは、毛深い人ですが、わたしはなめらかです。おそらく父はわたしにさわってみるでしょう。そうすればわたしは父を欺く者と思われ、祝福を受けず、かえってのろいを受けるでしょう」（創世記 27:11,12）と言っている。それでも、母親の陰謀に従って、ヤコブは、兄の服を着て、腕を動物の皮でおおい、高齢で目が見えなくなっている父親を巧みに欺くのである。

このように、どん欲さにはまり、振り回された結果、ヤコブは、苦難に満ちた旅路につく。彼は、兄エサウの怒りを恐れて逃げ、殺されるかもしれないという恐怖におそわれながら身を隠し、そして、自らもまた欺きの犠牲となる。それから何年も経ったのち、彼は、自分で仕掛けたワナから逃れる道を見いだす。彼は、確かに、「祝福ではなく、かえって呪いを受ける」ことを、自分にもたらしてしまった。しかし、最後には、ヤコブは、自分本来のもの、彼の善の本性が、表面に現われ、**神**の加護と **神**の愛は、途絶えることがないことを見いだすのである。

Author's Name /From the Editors

ヤコブの欺きは、少なくとも部分的には、物質的感覚を信用することで成立していた。ヤコブは、偽りの身分を名のするという手口を使った；彼の父親は、それを聞き、また、さわった感覚でだまされた。こうして、偽りのくもの巣が張りめぐらされたのである。キリスト・イエスの癒しと教えに基づくキリスト教科学は、実在は、物質的感覚とは全く無関係であることを明らかにしている。そして、この物質的感覚は、ただ非難することしかできないものなのである。痛み、負傷、病の証拠は、それ自体がごまかしであり、私たちがそれを養い育てたり、信じたりしなければ、私たちに何の影響も与えることはできない。感覚は、私たちの同情と、同意を得て初めて、私たちに取り入り、私たちの生活のなかで場を占めることができる。それは、善以下のものを受け入れることを認めるように、考えを誤って導こうとする。この事に関して、『**科学と健康—付聖書の鍵**』は、次のように忠告している：「病の兆候が最初に現われたとき、物質的感覚の証言を、神性**科学**で反論しなさい... 罪や病の主張は不法である、という確信を持ち続けて、これを追放しなさい、なぜなら**神**は罪の作者ではないと同様、病気の作者でもないことを、あなたは知っているからである」(メリー・ペーカー・エディ、p. 390)。

どんな形の欺きであれ、**神**の力から注意を反らせ、自分が、**神**の純粹で、正直な反映以下のものだと思わせるかぎり、それは不法である。私たちの生活、私たちの健康と幸福を生み出しているのは、**神**のみ、神性の**真理**のみである。私たちの世界も、隣人も、家族も友だちも、安全に守られていて、善を破壊しようとするものすべてから完璧に守られている

Author's Name / From the Editors

ことを、認めることが非常に大切である。そして、ヤコブの例にあるように、自分の過ちを認めるとき、善は、もう既にそこに現存するのである。

エディ夫人は、次のようなメッセージをキリスト教科学者たちに書き送っている：「あなた方は、『悩みの地にある、大きな岩の陰』にあつて、**神の基盤の上に築かれ、神の力に**守られているので、あなたをのみ込んでしまおうとするものから、神性の加護と愛によって、護られているとつまり知ることができることは、何と幸せなことであろう。**神の存在、力、平安が、すべての人の必要を満たし、すべての幸せを反映していることを、いつも意識に留めておいて欲しい**」 (*Miscellaneous Writings 1883-1896*, p. 263)。

たとえ、どん欲、無知、恐れ、またその他の否定的な性癖に、欺かれたにしても、私たちは、自分の家、退職金、貯金、仕事を、「のみ込もうとするもの」から守られている、なぜなら、私たちは、神性の保護のもとにあるからである。何が必要であろうとも、愛がここに存在して、その必要を満たし、導いてくれる。どんな人でも、一番安全なところは、「悩みの地にある、大きな岩の陰」である。何ものも、この実在から、私たちの注意を反らすことはできない。そして、この事実を認識したとき、すべての人が安全に、家に、つまり神のもとに、帰ることができるよう導かれるであろう。

Author's Name /From the Editors